



Title	G7 広島サミットに向けたプラネタリーヘルス大学間 パネル：持続可能な地球環境のためのプラネタリー ヘルス：未来を切り開く学際融合研究
Author(s)	鹿嶋, 小緒里
Citation	目で見えるWHO. 2023, 86, p. 10-13
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/93467
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

G7 広島サミットに向けたプラネタリーヘルス大学間パネル 持続可能な地球環境のためのプラネタリーヘルス ～未来を切り開く学際融合研究～



広島大学IDEC国際連携機構プラネタリーヘルスイノベーションサイエンスセンター（PHIS）センター長
大学院先進理工学科学研究科環境保健科学研究室 准教授

鹿嶋 小緒里

JICA短期協力隊セネガル、短期専門家マダガスカル、国連パキスタン洪水支援等に参加。専門は、環境疫学。近年はプラネタリーヘルス研究に取り組む。

はじめに： プラネタリーヘルスとは

2023年5月19日から21日に、広島でG7広島サミットが開催されました。サミットでは、G7各国首脳および招待国首脳・国際機関の長が広島市平和記念公園を共に訪問し献花を行うという歴史的瞬間は、皆様の記憶に鮮明かつ強く刻まれたことと思います。戦後78年目を迎えた現在、改めて被爆地広島から発信すべき「平和」についてのメッセージの重要性を全身で感じた瞬間でもありました。私たちの健康およびウェルビーイングにおいて、この「平和」なくしては実現できません。しかし、私たちの健全な

社会を考える中で、人間のみの「健康」や「平和」を捉えていては、将来世代にわたる「健康」および「平和」を手にすることはできない状況に世界は直面しています。気候変動、生物多様性の喪失、環境汚染、紛争をはじめとする地球規模で様々な課題が発生しており、私たちは「大いなる過渡期（Great Transition）」を迎えています。この大いなる変革の時、既存の枠組みの思考を超えた新しい健康科学への挑戦が求められており、2014年に国際医学雑誌Lancetの編集長Richard Hortonらがこの変革を求めて、「人間」「社会システム」「自然生態システム」の新たな関連性を見出し、それら3つのトータルな健康を地球規模で

目指す「プラネタリーヘルス」が提唱されました(Horton et al., 2014)。また2022年のLancet Public HealthのEditorialでは“*No public health without planetary health*（地球全体の健康なしに公衆の健康はありえない）”(The Lancet Public Health, 2022)と提唱されています。このような「大いなる過渡期」を迎える中、私たちは今までの閉じられた専門性から、様々な関連性や関係性を新たに拡張・見出し、健康やウェルビーイングを考える必要があります。そして、これには国の先導した取り組みもまた必要であります。

そこで、広島で開催されるG7サミットに向けて、「プラネタリーヘルス」を実践するために、私たちはどのような協力が必要かについて、2023年4月21日にプラネタリーヘルス大学間パネルシンポジウムを広島大学で開催いたしました(図1)。シンポジウムでは、2021年10月に出された「プラネタリーヘルスに関するサンパウロ宣言」(Myers et al., 2021)で推奨されている超学際融合研究を、より一層具体的に推進するため、新しい知の創成の「共創の場」をどのように作っていくかについて議論を行いました。そして本シンポジウムでの議論は、「広島プラネタリーヘルス宣言2023」として提言をまとめ、宣言が出されました。その内容について、ここにご報告いたします。

図1 プラネタリーヘルス大学間パネルシンポジウムポスターとプログラム

プラネタリーヘルス大学間 パネル

第1部

世界的な取り組みの紹介

第1部では、世界的にプラネタリーヘルスの取り組みを行っているバルセロナ国際保健研究所 (ISGlobal) 所長のアントニ・プラセンシア氏が「Planetary Health: an urgent global need」のタイトルで基調講演をいただきました(写真1)。Lancet Public Health 誌のeditorialを引用し、“No public health without planetary health (地球全体の健康なしに公衆の健康はありえない)”という強いメッセージと共に、ISGlobalのプラネタリーヘルスに関する考え・これまでの取り組みについて紹介をいただきました。また、プラネタリーヘルスを考える中で様々に絡み合う課題を解決するためには、クエスチョン (question) や目的 (objective) をまず共有・設定し、様々な分野や立場の人々が共に解を出してあっていく融合研究・活動の必要性についてお話がありました。



写真1 基調講演をいただいた、ISGlobal所長 アントニ・プラセンシア・タラダチ先生

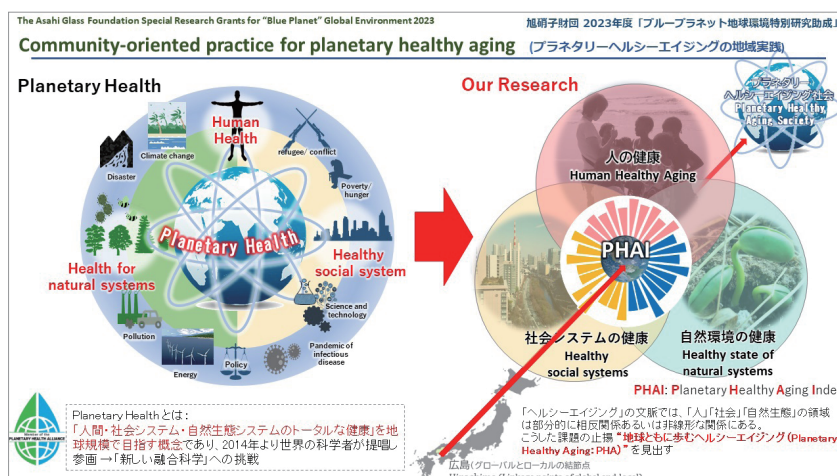


図2 広島大学「プラネタリーヘルシーエイジングの地域実践」研究事例紹介

第2部

大学間パネルディスカッション

第2部では、日本 WHO 協会理事長の中村安秀先生がモデレーターとして、日本でプラネタリーヘルスを実践している5大学からの先生方をお招きして、各大学が実践しているプラネタリーヘルス研究・教育の紹介と、さらなる学際融合研究のためには何が必要かの議論を行いました(写真2)。

具体的にパネリストからは、北海道大学 鈴木定彦先生より、人獣共通感染症

の発生現場におけるワンヘルスおよびプラネタリーヘルス研究・教育に関する取り組みの紹介がされました。次に東京医科歯科大学 中村桂子先生からは、プラネタリーヘルスアライアンスが提唱するプラネタリーヘルス教育のフレームワークを具体的に説明いただくと共に、現在開講しているプラネタリーヘルスに関する大学院講義の紹介がされました。東京大学 橋爪真弘先生からは、気候変動に関連する健康影響の最新研究、COP26 (国連気候変動枠組条約第26回締約国

会議) 終了後の世界的取り組み、そして「気候変動に強靱な保健医療システム」の必要性が紹介されました。長崎大学 渡辺知保先生からは、学部新入生全員を対象としたプラネタリーヘルスカリキュラムの紹介と、博士課程生へのプラネタリーヘルス学環プログラムの紹介、そして国際的な学生プロジェクト「Planetary Health Report Card」の取り組みが紹介されました。最後に広島大学の藤原章正先生からは、広島大学 IDEC 国際連携機構 PHIS が新たに2023年4月からスタートした「ヘルシーエイジング」と「プラネタリーヘルス」を融合した超学際融合研究「プラネタリーヘルシーエイジングの地域実践」研究の具体的な紹介がされました。プラネタリーヘルスの実践研究事例としてその紹介図を紹介いたします(図2)。(プロジェクト WEB サイト: <https://phai.hiroshima-u.ac.jp/>)



写真2 大学間パネルディスカッションの様子

パネルディスカッションでの議論

そして、パネルディスカッションにおいて、モデレーターの中村安秀先生、5大学からなるパネリストの先生方に加え、ISGlobalのアントニー先生にも参加をいただき、プラネタリーヘルス学際融合研究を進めていくための「①研究」「②人材育成」「③日本の役割」について議論を行いました。

「研究」では、プラネタリーヘルスのための融合研究の障壁やその解決策について次のような議論がされました：研究者の各領域によって視点や言葉が異なる点が融合の大きな障壁になっています。これに対しては、共有する課題やクエスチョンをまず設定し、その中で様々な領域や立場の人から解を共に出してあっていく事が、この障壁を崩す重要なカギとなります。これは、リサーチオリエンテッド（研究からの視点）から、地域課題オリエンテッド（地域と共にある視点）とすることの重要性が改めて強調されました。そして、これまで別々に設定されていた様々な課題は、“プラネタリーヘルス”という言葉で繋ぐことができます。これらつながりの中で、新しい取り組みがまた生み出され、それを創出していくことが新しい科学であります。

「人材育成」では、次のような議論が

されました：これまで述べた研究・活動を実践するためには、若い世代の早い段階かつ自然な流れでの学際融合研究参加が必要であります。各大学においての人材育成基盤の拡充が喫緊の課題であり、さらなる教育システムの共同した構築が必要であります。

「日本の役割」では、主に世界と共有すべき事項について議論されました：日本古来の自然を崇拝する文化的背景や、里地、里山、里海等の私たちが先祖から受け継いでいる自然と共存する生き方への再認識が必要です。これら活動の発掘や再認識を“プラネタリーヘルス”という言葉の下で行い、国際的に知見を共有すべきであります。この、地域社会にもある解決策は、日本に限らず、各国・各地域に存在しており、このような取り組みを国際的にかつ相互的に共有を促進する必要があります。加えて、超高齢化社会を迎えている日本から、プラネタリーヘルスと共にあるヘルシーエイジングへの取り組みを実践し、発信を行うこともまた大切です。

そして、本パネルディスカッションで具体的に議論されたこれらプラネタリーヘルス実践研究と活動は、地域社会と共に歩む必要があり、大学の中にある領域が融合する学際融合の枠を超えて、地域社会とも融合した超学際融合とすべきで

す。また、これらすべてのアプローチにおいて、平和を希求する精神に立ち返り、再認識する必要があることが、このヒロシマという地からあらためて世界へ発信すべきメッセージであることがまとめられました。

最後に、これら議論を「広島プラネタリーヘルス宣言 2023 “大いなる転換期 広島プラネタリーヘルス宣言”

における平和の希求：社会と共に歩むプラネタリーヘルス科学のための教育と研究」として提言をまとめ宣言が出されました。本宣言文は広島市平和記念公園に届いた折り鶴で再生された紙に印刷し、パネルディスカッション参加の先生方が代表として署名をいたしました（図3）。この宣言では、平和を希求し、人々のくらしの中からも解決策を見出し、「プラネタリーヘルスにおける社会と共に歩む科学」を追求・実践するための教育・学際研究基盤構築の必要性について取りまとめております。シンプルな宣言ではありますが、さらなるプラネタリーヘルスの大きな波を起こしていく事に、少しでも貢献できることを願っています。（広島大学ホームページ開催報告：<https://www.hiroshima-u.ac.jp/news/76843>）

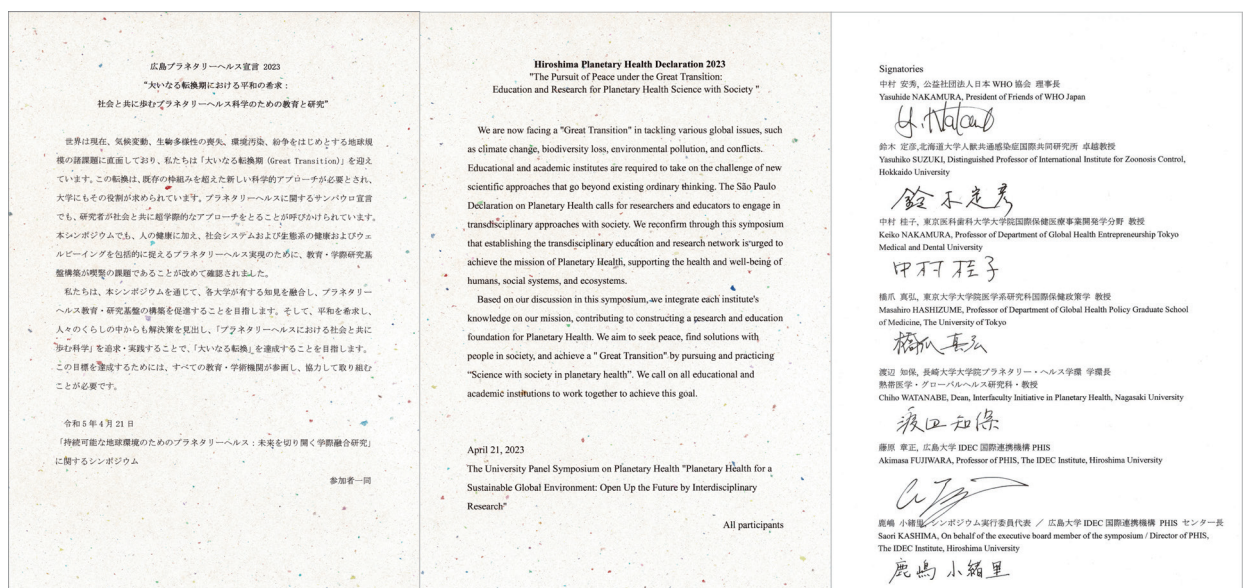


図3 広島プラネタリーヘルス宣言2023“大いなる転換期における平和の希求：社会と共に歩むプラネタリーヘルス科学のための教育と研究”

おわりに

世界では、気候変動をはじめ様々な地球規模での課題が発生しています。加えて、いまだ多くの地域で紛争も続いており、尊い命が苦しみ、奪われています。これら要因は複雑に絡み合っており、私たちはプラネタリーヘルスという共通の目標の下で、この「大いなる変革（Great Transition）」に取り組む必要があります。本シンポジウムには、世界 15 カ国 53 機関から 130 名を超える参加者がありました。ここで議論され学んだ内容を少しでも皆様と共有すべく、実行委員メンバー（写真 3）一同で、プログラムブックを作成いたしました（図 4）（プラネタリーヘルス大学間パネルシンポジウム実行委員会、2023）。今回のシンポジウムでは大学の役割を中心に議論されましたが、さらに様々な立場の皆様との議論が必要です。このシンポジウムはまだ小さな一歩ですが、これをきっかけとして、平和を希求するプラネタリーヘルスの momentum（気運）がより一層広がることを祈念するとともに、皆様方と「私たちのふるさと（地球）の健康」について共に考え議論できることを願っております。

謝辞

このシンポジウム開催にあたり、まだ形にもなっていない段階から、大きく背中を押してくださいました、日本 WHO 協会 中村安秀先生、東京医科歯科大学の中村桂子先生、パネリストの先生方皆様、そしてシンポジウムを全力疾走でサポートしてくれた実行委員メンバーに、心よりお礼申し上げます。また、日程の関係で参加いただけなかった熊本大学様をはじめ、参加くださった皆様方に、この場を借りましてお礼申し上げます。

参考文献

- Horton R, Beaglehole R, et al. "From public to planetary health: a manifesto". The Lancet 2014; 383: 847.
- Myers SS, Pivov JI, Saraiva AM. "The São Paulo Declaration on Planetary Health". The Lancet 2021; 398: 1299.
- The Lancet Public Health. "No public health without planetary health". The Lancet Public Health 2022; 7: e291.
- プラネタリーヘルス大学間パネルシンポジウム実行委員会. "大学間パネルシンポジウム：持続可能な地球環境のためのプラネタリーヘルス：未来を切り開く学際融合研究". 広島大学, 2023. <https://doi.org/10.15027/54002>



図4 抄録集としてとりまとめ出版したプログラムブック



写真3 パネリストおよびシンポジウム実行委員メンバー